

2024年3月10日 No. 3710

先週の講壇から

“ 網を捨てる ”

マタイによる福音書 第4章 18節～25節

聖句「イエスは、『わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう』と言われた。二人はすぐに網を捨てて従った。」(4:19,20)

1. 《リストラ》 バブル崩壊以後、庶民の多くは「リストラ」という語に怯えながら暮らしています。「リストラクション」は「再構築、再編成」の意味です。政治家の言う「構造改革」も同じです。しかし、多くの国民は「リストラ」が「クビ切り」の意味だと知っています。最近「ダウンサイジング」と語を変え始めましたが、要するに人員削減、人件費削減であることに変わりありません。
2. 《棄民政策》 「リストラ」という語が流行する昔から、日本では同じ政策が繰り返されて来ました。「国鉄解体」も、エネルギー転換による炭鉱の閉鎖もリストラです。原発が首都圏から離れた過疎地に建設され、核燃サイクル施設が更に遠方に作られることを、岩田雅一牧師は「棄民」と呼んでいました。「棄民政策」は明治政府が無禄士族や貧農を海外に送り出す政策でした。発案したのは榎本武揚です。移住する人たちは「移民」と理解していましたが、国は「棄民」を自覚していたのです。植民地の拡大と共に、満洲や東南アジアにも波及して行きます。為政者や経営者の側からすれば「構造改革」でも、民の側から見ると「廃棄処分」なのです。少なくとも雇われている側まで、経営者の考えに付度する必要はありません。
3. 《漁師廃業》 イエスさまのお召しの一言で、4人の漁師が弟子になって付いて行きました。この出来事を、私たちは「従順の鑑」のように教えられて来ました。でも、別の日の礼拝では「愚かな弟子たち」と評されて毀誉褒貶が激しいのです。「ルカによる福音書」は「おびたしい魚が取れる」豊漁の奇跡によって、ペトロたちの回心を説明しています。代わりに「マタイによる福音書」には「おびたしい病人」が登場します。単なる「病人」ではありません。家族からも地域社会からも、ユダヤ教からも見離された「棄民」なのです。社会構造の変化のために暮らして行けなくなったとは言え、漁師が「網を捨てる」こと、農民が「鋤や鍬を捨てる」ことは、どんなに辛いことだったのでしょうか。しかし、イエスさまに付いて行くと、そんな深い傷が少しずつ癒されて行ったのかも知れません。

朝日研一朗牧師